

渡辺克己著

豊後の
武將と合戦

【第一章】緒方惟栄の宇佐八幡襲撃①



目次

【写真】 宇佐神宮南楼門

第一章 ● 緒方惟栄の宇佐八幡襲撃 ①

- ① 平氏追悼の院宣
- ② すわ！緒方の反乱
- ③ 怖しき者の末
- ④ 昔は昔、今は今
- ⑤ 平家の逃避行
- ⑥ 平家は四国へ

※ 奥付け／デジタルブックについて

（題字と挿絵は二紀会委員・菅久）

● 原著案内

本デジタルブックは、以下の書籍「豊後の武将と合戦」をデジタル化したものです。

「豊後の武将と合戦」

著者：渡辺 克己

A5版 314 ページ

発行：大分合同新聞社

発行日：2000年2月15日

定価：2300円（税込み）



購入問合せ：その他の大分合同新聞社の本については、大分合同新聞文化センターへ
電 097-538-9662 「合同新聞の本」 Web ページ



宇佐神宮南楼門

① 平氏追悼の院宣

— 祖先の無念晴らす時 —

「この機をとらえて宇佐八幡へ兵を向け、大宮司公通（きんみち）殿にひとあわ吹かせくれよう」

緒方三郎惟栄（これよし）の決意が、具体的に胸に居すわったのは、平家が都を落ち、九州入りをした直後、豊後の知行国主である刑部卿藤原三位頼輔から「後白河院の院宣」と号して平氏追討の下知がもたらされたときであった。

下知を伝えたのは豊後国の目代（代官）藤原頼経（よりつね）であった。頼経は頼輔の子である。

知行国主は、一地方の国務の執行権を政府から与えられた権力者。目代は知行国主の命に従って任国を支配する代官である。頼輔はこの重大な時局に対処するのに最も信用できるわが子を代官として在国させていた。

平氏追討の下知は、次のように厳しいものであった。

「平家は神明にも見放され、主上にも捨てられて都を落した。

はや波の上をた

だよう落人（お

ちうど）にすぎ

ない。この平家

に対して、九州

二島の者が出迎

えて奉仕するこ

とは無意味であ

る。当国におい



ては断じて従ってはならぬ。よろしく東国、北国の源氏と一味同心して、平家を九州から追い出すべし。これは後白河院のお言葉である。忠ある者には恩賞を与える」

惟栄は、都の情勢は諜者（スパイ）からの情報で、すでに十分つかんでおり、平氏が大宰府に落ちたことも、最も新しい諜報として耳にしていたので、これを追い出せという下知が来ることの予期はしていた。

平氏一門が、安徳幼帝を奉じて大宰府に入ったのは、寿永二年（一一八三）八月十七日であった。これは九州の武士が味方に馳せ参じることを頼みにしてのことである。

九州の武士で、平氏の家人（けにん）になっっている者は少なくない。平氏としては、これらの者を不足なく手なずけてきたはずであった。しかし出迎えたのは、大宰府を守る筑前国筑紫郡の岩戸城主原田種直の軍勢だけであった。九州入りのさい都から供をして来た菊池次郎高直などは、口実を設けて、居城である肥後国の隈府に引き籠ってしまい、いくども使いを走らせて出頭をうながしたが、なま返事ばかりで動こうとしない。九州の諸豪族は、平氏の凋落（ちようらく）をまのあたりにして、鳴りを潜めているのだ。

東国の源氏は、すでに侮りがたい勢いにふくれ上がり、京には木曾の冠者源義仲が攻め入った。後白河上皇は、すばやく平氏を見捨てて源氏に手を差し伸べ、平氏追討の院宣まで下し給うた。世は大きな転回へ動き始めたのだ。

「もはや猶予するときではあるまい。藤原三位卿の下知に従うて、院宣を奉じ、手柄を立てておくことは、豊後武士の安堵

(あんど)のためにも、取るべき道ではないか」

惟栄は、兄の白杵次郎惟隆(これたか)、弟の佐賀四郎惟憲(これのり)ら一族に心のうちを明かし、兵の集結をうながしたほか、九州一円の武士たちにも回文(まわしづみ)をして、同調をすすめた。これと同時に、宇佐八幡宮襲撃を決行しようという思いが、鮮明な炎をあげたことは、平氏追討の旗をあげたことと、同じ軌道上にあるとはいえ、彼の心の中では、異質のものを、機を得て嚙(か)み合わせたにすぎなかった。

「まこと申せば、平家には何の恨みがあるうか。弓矢とる身からすれば、われらは、今は亡き小松殿(平重盛)の旗下にあつたのじゃから、平家に味方するのが筋でこそあれ―。これも時の勢いと申すものよ。しかしな、宇佐の大宮司は違うぞ。公通殿に対しては、気の毒じゃが、われらが祖先の宇佐氏に対する無念の思いがある。それらを晴らす時節が到来したと思え」

一族郎党には、惟栄の胸のうちを、このように説明した。

惟栄が根拠地としている緒方荘は、宇佐八幡宮の荘園となっており、惟栄はその荘司として宇佐八幡の支配下に、荘内の年貢の取り立て納入や祭礼の身役奉仕、社殿造営などの奉仕分担をさせられており、惟栄個人としても宇佐八幡信仰の、敬けんな思いはあった。

②すわ! 緒方の反乱

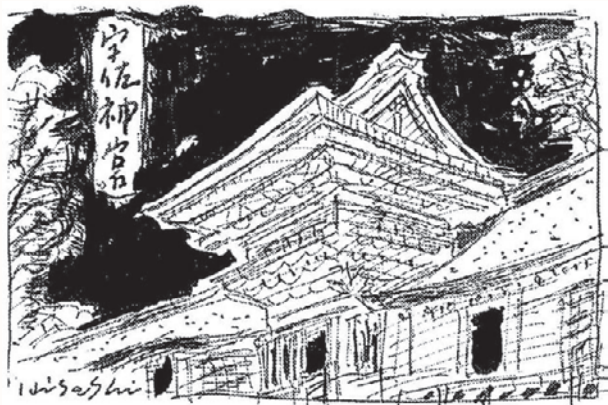
― 宇佐宮への年貢拒否 ―

宇佐八幡宮の大宮司職は、六世紀の末ごろ大神比義(おおがひぎ)が応神天皇の神霊を奉じて大和より下り、八幡宮の社格

を確立して以来、大神氏の独占のもとにあった。これに對して、在地の勢力である宇佐氏が、大神氏の圧力を、しだいに押しつけて実力を回復し、平安時代初頭ごろから、大宮司職の競望が激しくなった。そしてついに、天喜五年（一一〇五七）に宇佐氏が勝つて大宮司職を獲得した。それ以後、ことごとく大神氏を圧迫し、大宮司職に大神氏が再歸する道を断つた。

望みを失つた大神氏は、追放同様のみじめな思いを抱いて豊後に下り土着した。これが豊後大神氏の始まりで、一族はしだいに豊後各地に根を張り、武力を蓄え、大野、緒方、白杵、佐賀（佐賀関）など、その地名を名乗って割拠、在地武士団として侮り難い勢力となった。だから豊後武士の血の中には、反宇佐氏意識が代々、火種のように潜在し、伝えられてきたのである。

緒方三郎惟栄の、宇佐八幡大宮司に對する反抗の姿勢は、既に数年前から見せていた。治承三年（一一七九）に、惟栄が主と仰いでいた平重盛が死亡。その翌年には、後白河上皇の第二皇子・以仁王（もちひとおう）が源頼政と謀つて、平氏討伐の令旨を諸国の源氏に發する。



つづいて源頼朝が伊豆の配所で挙兵。これに呼応して、木曾の源義仲が反平氏の兵を集結。そして平家の頼朝討伐軍が、富士川の戦いで大敗、など中央のあわただしい情勢に、惟栄はいち早く平氏衰退のきざしを感じとった。

と共に、日ごろ平氏の威を背に、豊後武士団を見下ろし、威丈高に臨んでいる宇佐の大宮司も、身の縮む思いをしているだろうから、こころでひとつ豊後武士の骨のあるところを見せておかねばなるまい、と考えた。

折りも折り、豊後の目代藤原頼経が視察の名目で緒方の館を訪れ、中央の情報を好意めかして聞かせてくれながら、次のようにささやいたことがあった。

「平家にも、そろそろ秋風が立つて来た。してみれば緒方殿もいつまでも宇佐殿の走り使いでもあるまいよ」

この意見は、父頼輔の言葉だともいった。

宇佐大宮司公通（きんみち）は、あからさまに平家一辺倒で、権益の拡大にきゆうきゆうとし、平清盛の引き立てで、神職でありながら豊前の国司に任ぜられ、また大宰府権少弐から対馬守の役職まで手に入れるという出世ぶりであった。

平家嫌いの後白河院に接近し、平家に背を向けている藤原頼輔としては、このような宇佐氏の振る舞いに、不快の念を禁じえなかつたのは当然であった。だから頼輔はわざと、宇佐氏支配下にある八幡宮別当寺・弥勒寺の寺領の一部を横領し、訴えられたが相手にせず、横領を続けているという、嫌がらせもやっていた。

惟栄は、そんないきさつを見ているから、頼輔からのそその

かしと承知しながら、大宮司への反抗心に弾みをつけた。

治承四年（一一八〇）、惟栄は宇佐宮に緒方荘より納入すべき年貢を、公然と拒否した。驚いた大宮司は、手厳しい督促の使者を送った。

「上納を拒む者は、社敵とみなし措置する。覚悟はできているであろうな」

いつもの横柄な口調の上に、神に敵対する者は神罰を受ける「社敵」として処断するという脅しの口上である。惟栄はそんな脅しに今更驚きはしない。使者がまだ何か言おうとするのを押さえ付けるように声を高めた。

「いやしくも八幡の神威を、平家の袖（そで）の下に成り下からせて恥じぬ大宮司殿に、緒方荘の年貢上納はご免こうむりたいとお伝えあれ」

顔色変えて馳せ戻った使者の報告を受けた大宮司は「すわ、緒方の反乱」と、驚きあわてて、早馬をもつて京都・六波羅の平家に注進している。だが、もはや、六波羅の平家一門としては、遠い九州からの注進などにかかわっておれない、足元の大事に右往左往していた。

③ 怖しき者の末

—— 平資盛が説得役に ——

都落ちをした平家が、安徳幼帝を奉じて、筑前の大宰府に入っただのは、九州武士を味方にする望みを持つてのことであるが、来てみれば不安におびえることの方が多い。

その最たるものは、平家の味方であるはずの、故平重盛の

家人であった豊後の緒方三郎惟栄（これよし）が敵に回ってしまった。三年前に宇佐八幡から「緒方の反乱」の注進が六波羅に届いたが、それは宇佐八幡と緒方の不和ぐらいに、軽く考えていたが、この度は、平家追討ののろしをあげたとの情報である。

“かの惟義（これよし）（惟栄）は怖（おそろ）しき者の末にてぞありける”と、平家物語や源平盛衰記には、平家方の惟栄に対する畏怖のさまを述べている。日向国に崇（あが）められている高知尾（高千穂）明神の神体である大蛇が、人間に孕（は）ら（ませて）産まれた者の子孫である、という神婚伝説が、真実めいて平家の公達（きんだち）たちを怖がらせていたのである。

その「怖しき者」は、反平家の旗幟（きし）を明らかにし、国司の下知を院宣と号して九州一円に回文（まわしづみ）をし、

主たる武士は皆これに同調したというのだ。このような情報、事実には輪をかけて誇大に伝えられるので、平家の人々は不安を募らせた。

このとき新中納言平知盛が、一同をなだめて言った。

「惟栄は、亡き小松殿（重盛）の御家人であることは、皆も先刻承知のとおりだ。道理を尽くせば、意志をひるがえして平家に味方しようと、言う



てくれぬものでもあるまい。平家に恩があつても源家には縁もゆかりもないはずじゃ。だれか公達が出向いて、論してみてもどうか」

これには異議のあろうはずはなく、適任者として、故重盛の二男、新三位中将資盛（すけもり）が選ばれた。にわかにも重責を負わされた資盛は、兵五百騎ほどを従えて、豊後へ馳（は）せ向かった。

「いかなる鬼のような武者でも、わざわざ出向いて誠を尽くして話せば、心を開いてくれぬはずはない」——という期待を、念ずるように、胸に繰り返し畳み込んで、資盛は緒方の荘へ入った。

平家の公達が、軍勢を従えての来訪に「すわ！」とうち騒ぐ兵たちを鎮めて、惟栄は丁寧に資盛を館（やかた）に迎え入れた。

「惟栄殿は、亡き父重盛が、心から頼もしゅう思い、平家にとつては大きな味方と信じて参つた、小松家の御家人ではありませんんか。されば、惟栄殿には今も、平家へ何ら含むところがあるうとは思いません。私は、平家の命運を託されてお願いに参上した。お味方してください」

資盛は、悲壮にみちた表情で、ひたすら懇願した。

豊かな水をたたえた緒方川を挟んで、東西に広がった田園地帯は、秋の実りを前の若い稲穂が波打ち、稲の甘い香を風に乗せて、惟栄の館を押し包んでいた。

兵（つわもの）たちも、物々しい鎧突（よろいつき）の音を立ててはいても、その目には露骨な敵意を感じさせないように、

とげとげしさはなかった。

惟栄も、資盛の言葉を、うなずきながら聞いている。その柔らかな態度には「応」と言ってくれそうな鷹揚（おうよう）さがあった。それは、資盛に都合のよい空頼みの感触であったが、厚意ある返事をもらえることにのみ必死の望みを託している身には、それ以外に考える余地はなかった。

惟栄は心の中でつぶやいていた。

「弓矢とる身に後戻りはない。もう押し戻せない運命の激流に、敵も味方も乗せられているのだ。平家の公達の誇りをかなぐり捨てて、一心に頼んではいるが、もう駄目なものは駄目だ。気の毒だが……。平家は再び都の土を踏むことはかなうまい。大風のもと、まさに倒れんとする巨樹を、支えようとすれば共に折れるだけよ。とにかく、戦わずして平家が九州を出てくれるなら、これに越したことはないのだが――」

④ 昔は昔、今は今

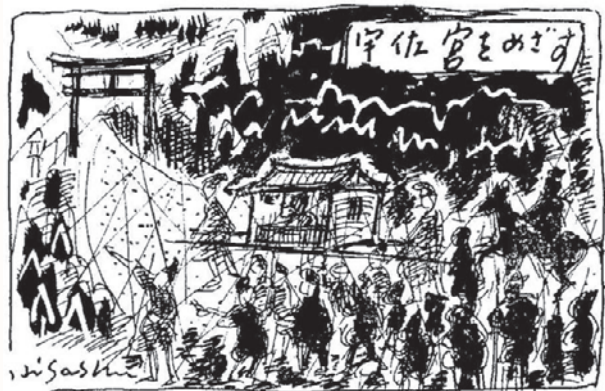
—— 三方から大宰府攻め ——

平資盛の、るると懇願する言葉のとぎれるのを待って、緒方惟栄（これよし）は言った。

「まず、お手を上げてくだされ。資盛殿」

そして、わざと冷ややかな口調で言った。

「どのようにお言葉を尽くされようと、惟栄がこうと決めたことは動きませんぞ。そもそも豊後の緒方惟栄づれが、西向こうと東向こうと、もはや、時の流れはどう防ぎようもありますまい。はやはや大宰府へお還りなされ。公達（きんだち）殿を



取り押さえようと襲いかかる者どもが、どこに潜んでおるやも分かりませぬぞ。油断なくお還りなされよ。御一門には、九州の武士どもには、はや望みは断たれた、とお話なされるがよい」

すこすごと引き揚げて行つた資盛のあとを追うようにして、惟栄は、次男の野尻次郎惟村を使者として大宰府へ行かせた。資盛の来訪に対する返答を持たせたのである。豊後武士の覚悟のほどを、きちんと伝えて、平家一門に了解してもらいたかつたのだ。

「緒方惟栄にとつては、平家は重恩の君におわしますれば、甲（かぶと）を脱ぎ、弓の弦（つる）をはずして、降参つかまつるべきでありませぬが、ただ今は、院宣を忝（かたじけ）のうした身でござる。平家を九州より追い出すべしとの仰せに従わねばなりません。お察し下されますよう」

できる限り弓矢を交えることなく、平家に九州から立ち退いてもらうことが、惟栄にとって、せめてもの心尽くしであることを、言外に含めた口上であった。

惟村に対面したのは、平大納言時忠であった。時忠は、清盛の妻・二位の尼の兄で、頑固な老人である。たかが九州の田舎侍に脅かされて、おろろするしかない一門の落

ちぶれ果てた今のありさまが、ただ腹立たしくてならない。そんな時忠に、惟栄の心が読めようはずがない。込み上げる怒りを面にあらわにし、声荒らげて言った。

「亡き太政大臣入道（清盛）殿は、保元・平治の乱を鎮めて、九州の子どもをば朝廷に召されるよう取り計らわれた。その恩を忘れたか。鼻の豊後めが、頼朝、義仲にへつろうて、院の御名をかたり、平家追討に味方するなら、国を預けよう、庄を与えようのと、まことしやかな大嘘（うそ）を並べるのを真に受け、その下知に従うとは、もつてのほかじゃ。―理（ことわり）の分別もつかぬ惟栄がたわごと、聞く耳持たぬわ」

鼻の豊後とは、豊後の知行国主藤原頼輔の渾名（あだな）である。頼輔が並みはずれた巨大な赤鼻の持ち主であるため、陰でこうあざけり呼んでいた。

帰還した惟村の報告を受けた惟栄は、慚然（ぶぜん）とした顔でつぶやいた。

「これはしたり―。昔は昔、今は今。それならば軍勢を大宰府へ差し向け、追いつくまでのこと。よし決まった」

直ちに出動の準備にかかった。

―宇佐八幡へ向けて兵を起す前に、大宰府を攻めて豊後武士の力試しをしておくのも、この際わるくはなからう―と、惟栄は自らに言いきかせた。

史書によれば、大宰府への進攻路は、豊前から攻め上がる北道と、肥後・筑後より攻める南道と、日田から直ちに筑前に入る中道の、三方から軍勢を進めたという。北道は白杵惟隆の軍、南道は惟栄自らの軍、中道は惟栄と姻戚（いんせき）関係にあ

る日田荘の大蔵永秀（日田の大蔵家には惟栄の妹が嫁いでいる）の軍が進んだ。

しかし北道は、平家に味方することを明らかにしている豊前武士団の雄、板井種遠（たねとお）の軍に、宇佐で阻まれて進めず、中道の大蔵永秀軍が先陣となり、南道の惟栄軍が主力となつて攻め進んだ。その勢いは三万余騎と伝える。

なお、豊前の板井種遠は、宇佐八幡大宮司公通（きんみち）の子に娘を嫁がせ、宇佐氏と姻戚関係にある。惟栄が宇佐八幡を襲撃したとき、八幡宮を守つて惟栄軍と戦つたのも板井種遠であつた。これは後に詳述する。

⑤ 平家の逃避行

—— 頼みの綱は宇佐八幡 ——

緒方三郎惟栄（これよし）の軍勢が来襲する、との報（しらせ）が大宰府にはいると、平家方の元気のいい源大夫判官季貞、摂津判官盛澄ら若手が、「攻めて来るのを、ただ待つのみではなさない。迎え撃つて、惟栄めらを搦（から）め捕（と）つてしまえ。今後のみせしめにもなる」と、三千余騎をもつて馳（は）せ向かった。

頼もしく見えたが、怒濤（どとう）のように寄せる豊後の軍団の前には力不足である。筑後国竹野（今の浮羽郡竹野）の本庄で、それでも一昼夜防戦したが、大敗して大宰府へ逃げ帰った。たちまち平家方は恐慌に陥つてしまった。逃げ帰つた平軍のあとを追つて、雪崩のごとく惟栄の大軍が迫っている。豊後の惟栄は「怖（おそろ）しき者の末」といううわさを、真実め

いて皆が耳にしていることなので、一層、恐怖心をかりたてたのだった。

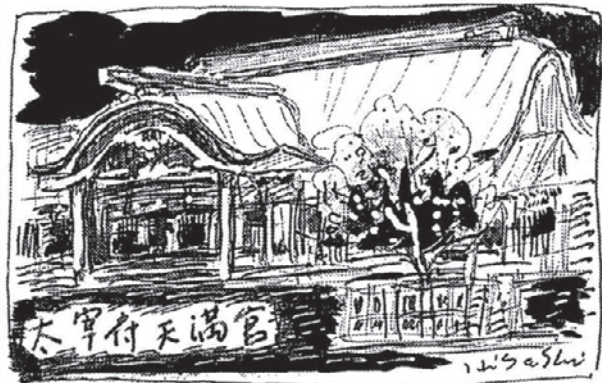
あわてふためいた平家方は、とる物もとりあえず大宰府を落ちていった。時に寿永二年（一一八三）十月二十日。平家の大宰府滞在は二カ月足らずであった。

筑前国の山野は秋色いよいよ濃く、折りから降り出した雨が、

落ち行く人々の行く手を阻んだ。その、はじめなありさまは『平家物語』などに細かに記述されている。要約すると、次のような、惨たる逃避行であった。

— 安徳幼帝は、お乗りになる輿（こし）も、これをかつぐ輿丁（よちよう）もいないので、形ばかりの手輿（たこし）（手で腰のあたりまで持ち上げて担い行く乗り物）にお召しになり、御母君の建礼門院をはじめ貴顕の女房たちは、袴（はかま）の裾を高くあげ、大臣以下の諸卿、雲客（殿上人）は、指貫（さしぬき）の袴（裾（すそ）を糸で指し貫き、ふくらませてくくるようにした公卿などの着用する袴）をたくしあげて、はだしで我れ先にと急いだ。

どしゃ降りの雨の中、吹く風は砂を吹きあげ、落ちる涙、降る雨で先も見えないありさまであった。峻（けわ）しい山坂、あるいは果てしない砂浜を、かつて経験したこともない、おぼ



つかない足取りでたどるのだから、足は傷ついて、流れる血は砂を染め、袴の裾を紅にした――。

ようやく平家に味方する筑前国岩戸の武士・原田種直（たねなお）が、二千余騎をもって駆けつけたが、同じく筑前山鹿（山賀）の武士、山鹿兵藤次秀遠（ひょうどうじひでとお）が数千騎でお迎えに参ると聞くと、引き返してしまふなさけなさ。種直と秀遠とは大層な犬猿の仲であったのだ。九州には数少ない平氏の味方が、一大事に際してこんなことでは、心細いこと限りない。

かろうじて兵藤次秀遠に迎えられて山鹿の城に落ち着いたが、ここも敵が攻めて来るとのうわさに、あわてて城をあとにし、遠賀川の川口、昔屋から小船をつらねて海上にこぎ出し、夜を通して豊前国柳ヶ浦へ着いた。柳ヶ浦を、豊前企救郡、いまの北九州市大里付近とする説があるが、この物語では、宇佐の柳ヶ浦説をとる。――

このように、緒方惟栄の来襲におびえて、大宰府を落ちた平家一門の逃避行は惨たるものであった。

今や、頼みの綱は宇佐八幡大菩薩の神助であり、大宮司公通（きんみち）の忠誠心であった。宇佐宮に近い柳ヶ浦へ上陸したのもそのためであった。

一行は、幼帝を奉じて八幡宮をめざした。守護の武士たちは、甲冑（かっちゅう）・弓矢を帯しての供揃（ともぞろ）いで、玉砂利を踏む音も力なく、社前に肅然と整列した。

幼帝は、大宮司の館にお迎えし、ここを仮の皇居とした。平家の公達（きんだち）や位のあるものは社頭を居所に、五位、

六位の官人は回廊に、兵士たちは甲冑をつけたままに庭上におし並んで、七日間の参籠（さんろう）をしたのである。

平家一辺倒で、平家の恩沢に最も浴してきた大宮司公通が、頼もしい神助を引き出してくれるであろうという期待にすぎたの参籠であった。それに対して大宮司は、いかなる答えを出してくれたか――。

⑥ 平家は四国へ

―― 意気上がる豊後武士 ――

平家一門が宇佐宮に参籠（さんろう）して七日目の暁、一門の先達である内大臣平宗盛は、次のような夢を見た。

―― 御宝殿の御戸（みと）を押し開き、中より神のお声が響いた。

世の中の憂（う）さには神もなきものを、

心づくしになに祈るらん

夢から覚めても、この神のお声がありありと心に残った。憂さ“は宇佐に、心づくし”は筑紫にかけたもので、「時の勢いには宇佐の神の助けもかなわぬものを、筑紫（九州）に望みをかけて何をいのるのか、空（むな）しいことだ」という意味である。

神助などありえない、と冷たく突きはなされたのだ。宗盛は夢にことよせているが、無力と、滅亡への道をたどっている平家にすがりつかれては迷惑するとの、大宮司公通（きんみち）の心の底を読みとって、神のお声としたのだろう。



『源平盛衰記』によると、平知盛の使者、堅物太郎頼資の注進により、知盛の知行国である長門国目代・紀伊刑部大夫通資（みちすけ）が、大船団をもって、その日の深更に柳ヶ浦に迎えに来て、幼帝以下平家一行は、四国の屋島に向かうことができた。九州を出て行ってもらおう、という惟栄（これよし）らの目的は達したわけである。

哀れをとどめたのは、平重盛の三男、小松左中将清経であった。平家の前途に望みを失った彼は、その日の夕刻、小舟に乗って柳ヶ浦の沖合に漕ぎ出し、波に浮かぶ月に横笛の音を響かせていたが、

「都是源氏のために攻め落とされ、九州は惟栄のために追い出される。いまは網にかかった魚にひとしい。いづこへ行つても逃れる術はない。もはや無事ながらえる身とは思えない」と、

静かに経を読み、念仏して波に身を投げた。この時、清経は二十一歳の若さであった。

いま、宇佐市柳ヶ浦の駅館川が海に流れこむ手前に、小松橋と名付けた橋がかかっており、そのたもとに清経の哀話を伝える供養碑が建っている。

平家は九州を追い出され、四国へ渡った。これは豊後の緒方三郎惟栄の手柄であると

いうことは、時をおかず京都に伝えられた。

——惟栄の忠勤ぶりは、後白河院も源氏方も評価しておる。よくやった。

という豊後の知行国主藤原頼輔からの、喜びの使者も駆けつけた。

惟栄としては、大軍は動かさしたものの、さほど血を流すほどのこともなく、平家を四国へ去らしめ、大いに豊後武士の名声を高めたのだ。気を良くすることこの上もない。

この勢い付いた矛先（ほこさき）を、かねて心に決している八幡宮襲撃へ向ける好機だ。大宰府攻めのさい、白杵惟隆の軍を、豊前で阻止した板井種遠にも、一矢報いねばならぬ。

この惟栄の、動静を、息を殺してうかがっているのは、宇佐八幡大宮司公通である。

すでに神宮へ納めるべき緒方荘の年貢・濟物（さいもつ）を横領しつづけ、明らかに宇佐に対して反抗の牙（きば）をむいているのだ。

「惟栄は、次は宇佐攻めを考えておるにちがいない。怖（おそろ）しい男よ。う。急ぎ宇佐の備えを固めねば、おちおち眠れもせぬわ」

公通は、唯一の頼みとする豊前仲津郡城井の城主、板井種遠に、万一の場合の救援を頼んだ。板井種遠は、先にも述べたように大宮司公通とは姻戚（いんせき）関係にあるから依頼しやすい。種遠は、筑前岩戸の城主原田種直とは血縁に当たり、共に平家へ忠誠を誓いあっている仲だ。この度の緒方惟栄の大宰府攻めに際しては、豊前で白杵惟隆の軍を食い止めて動じな

かった実力を見せたばかりだ。公通としては、最も信頼できる武士であった。

惟栄が、宇佐八幡宮襲撃の兵を起こしたのは、平家が九州を去った翌年、元暦元年（一一八四）六月下旬であった。

それは勢いに乗じた決断であったが、自らの足元を崩す出発とは気付かなかつた。





オオイトデジタルブックは、大分合同新聞社と学校法人別府大学が、大分の文化振興の一助となることを願って立ち上げたインターネット活用プロジェクト「NAN-NAN（なんなん）」の一環です。

NAN-NAN では、大分の文化と歴史を伝承していくうえで重要な、さまざまな文書や資料をデジタル化して公

開します。そして、読者からの指摘・追加情報を受けながら逐次、改訂して充実発展を図っていきたく願っています。情報があれば、ぜひ NAN-NAN 事務局にお寄せください。

NAN-NAN では、この「ロマンを追って」以外にもデジタルブック等をホームページで公開しています。インターネットに接続のうえ下のボタンをクリックすると、ホームページが立ち上がります。まずは、クリック！！

デジタル版「豊後の武将と合戦」 第一章●緒方惟栄の宇佐八幡襲撃 ①

2008年6月6日初版発行

著者 渡辺 克己

原著 2000年2月15日発行／発行：大分合同新聞社

／制作：大分合同新聞社文化センター／印刷：小野高速印刷

《デジタル版》

編集 大分合同新聞社

制作 別府大学メディア教育・研究センター 地域連携部

発行 NAN-NAN 事務局

(〒 870-8605 大分市府内町 3-9-15 大分合同新聞社 総合企画部内)

© 大分合同新聞社、渡辺克己、菅久

◇著者略歴◇渡辺克己
大分県佐賀関町木佐上出身。大正二年生まれ。朝鮮京城で新聞記者。終戦で引き揚げ、大分合同新聞記者。こども新聞、芸芸部の部長を経て調査部長を最後に昭和四十三年定年退社。昭和二十七年から同四十二年まで大分市社会教育委員、昭和四十三年から同四十八年まで民生児童委員。
郷土史を研究し「大分今昔」「豊後の磨崖仏散歩」「国東古寺巡礼」「忠直卿狂乱始末」「真説・山弥長者」等の著書。